國學院大學学術情報リポジトリ

教科指導に必要なピアノ演奏力の育成：機能和声理論に基づくスタートプログラムについて

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高山, 真琴
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001363

教科指導に必要なピアノ演奏力の育成

― 機能和声理論に基づくスタートプログラムについて ―

髙山　真琴

【要旨】

教科・音楽を指導していく上で、教材として提示された楽譜を読み、そこに示された音楽を範唱あるいは範奏する力は、教師にとって必要不可欠のものである。教職課程に在籍する学生が、音楽用語を体系的に理解し、演奏という形で表現できるようになるためには、知識を自身の中で有機的に結び付け、楽譜を読むことと音に表すことの間になるべくタイムラグが生じない読譜の方法を理解しておく必要があると思料する。ピアノはその構造から複数の音を同時に出すことが出来、教科教育においては範奏の提示や歌唱伴奏、音感教育といった様々な場面で活用できる楽器である。本稿では、読譜の経験が乏しいピアノの初学者であっても、楽譜から音楽を掴むことができるようになるための初見の方法を提示するとともに、機能和声理論の理解とカデンツの動きを肉体的に習得することで可能になる主要三和音による伴奏法を提示し、限られた養成期間の中で、教科教育の実践に有用となるピアノ演奏力の基礎をいかに育むかについて考察する。

【キーワード】

読譜　伴奏　主要三和音　属七　機能和声理論

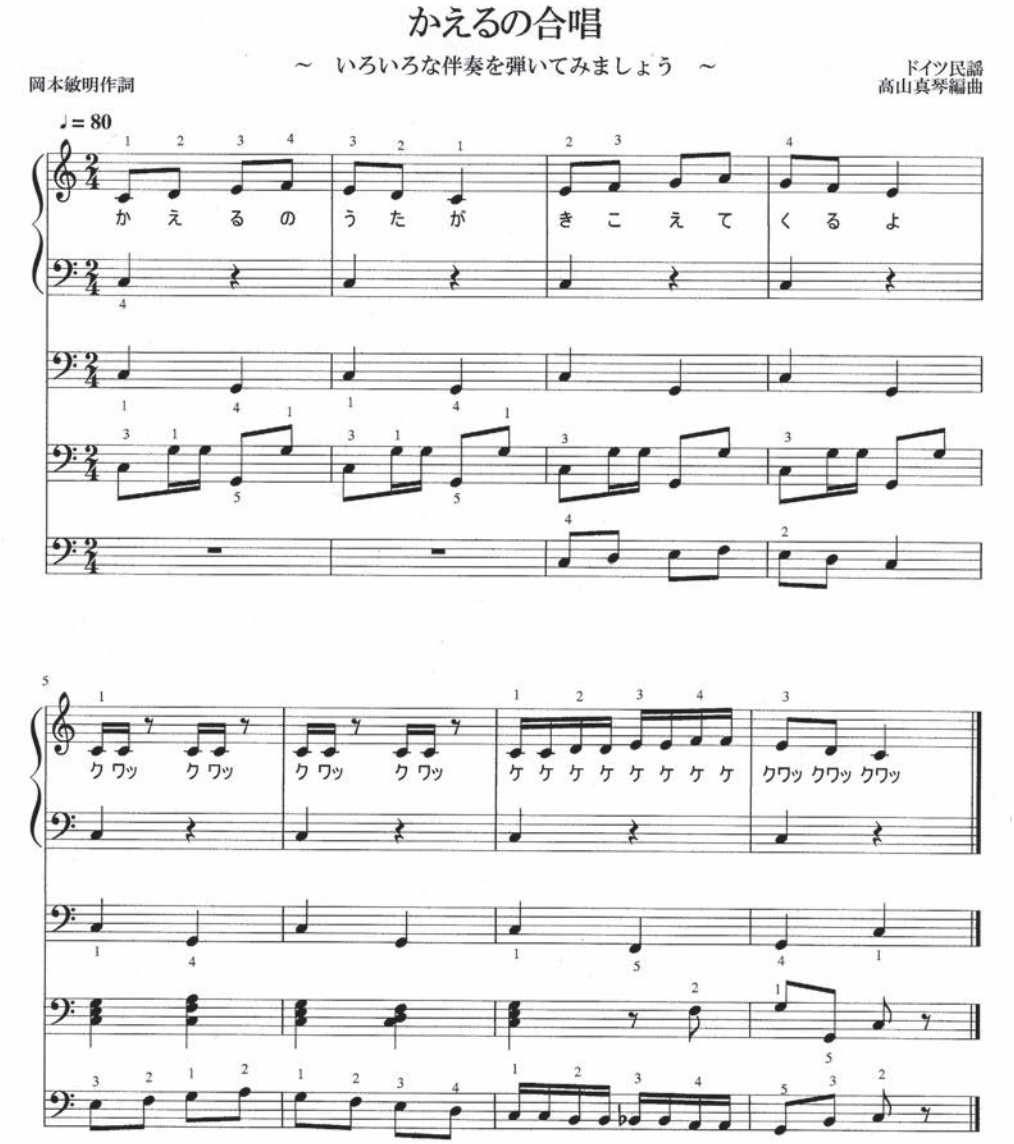
はじめに

平成29年3月に告示された新学習指導要領第6節・音楽を概観すると、教科を学ぶ本質的な意義が明確化され、表現及び鑑賞の領域における指導事項について、音楽の授業を通して育成を目指す資質及び能力が現行の指導要領には見られぬ具体をもって表記されていることから、教師には音楽についての理論を含めた専門的知識と音楽そのものへの理解、及び自ら音楽を表現する力が、今まで以上に求められるものと判断するに至った。教職課程に在籍する学生は、その点を踏まえ、教科指導に不可欠な読譜力、歌唱力、及び記譜された音楽を顕在化していくピアノ演奏の力を修得していく必要がある。養成校での限られた学修期間の中でそれらの力を育成するためには、教科・音楽の必修教材である歌唱共通教材や子どもの歌などを課題曲として用い、楽譜を読むことと同時に音に表現することを曲数多くこなしていくことが、自身の演奏表現のレパートリーを増やすことも含めて、必要であると思料する。

本稿では、ピアノの初学者であっても初見で音楽の構造をつかみ、ピアノを弾くことができるようになる初見の方法と、旋律を弾くことができれば伴奏も併せて弾くことができるようになる実践的伴奏法について、授業実践を例に示しながら考察していく。

1　読譜の方法

「かえるの合唱」を教材に、ピアノ演奏へタイムラグ無くつながる読譜の方法を示す。



譜例 1

［読譜の手順］

1）「かえるの合唱」（譜例１参照）を教師の伴奏で歌い、旋律を確認する。

2）記譜された旋律を見て、連なる音符によって表される形（モティーフ）や、旋律構造の特徴を言語化する。

3）モティーフの動きを捉えたら、音高を確認する。
4）指使いに留意し、右手で旋律を弾く。
5）右手で旋律を弾きながら歌う。
6）高音部譜表と低音部譜表は、加線で表される一点ハによってつながることを理解した後、各段の低音部譜表1段目を読み、音の動きの特徴を掴む。
7）左手を弾きながら歌う。
8）５）と７）を繰り返し行った後、両手奏を行う。
9）両手と歌を合わせて奏する。
１０）前奏とアインザッツを入れて弾き歌いを行う。

［指導上の留意点（読譜の手段と照合しながら）］

1）「かえるの合唱」は、誰もが知っている歌であると同時に、旋律の構造的特徴を捉えやすい点から、読譜練習の教材として有用である。楽譜を見ながら歌うことで、聴覚で捉えられている音の動きを視覚でも意識して捉えるよう促す。
2）五線譜を用いての音高の記譜の仕方を確認した後、「旋律は、音符一つ一つの高さを読むのではなく、まず景色として形をとらえること」と促す。学生は、1小節目は順次上行し2小節目は順次下行する音の動きを一つのまとまりと捉え、３、４小節目は同じ形では動くもののフレーズの始まりの音高が違うこと、７、８小節目は１、２小節目と同じ音ながら倍の数で刻むことに気づいていく。このように初見の段階で旋律を構造的に理解していくことは、読譜を合理的に効率よく行うために必要であると同時に、楽曲形式への理解、その旋律に当てはまる和音の動きの構造的理解へともつながっていく。
3）「かえるの合唱」を階名で歌い、音の動きの確認を行う。移調唱も試みることで長音階の持つ音程構造を相対的に捉えられるようになる。
4）一点ハから音階音順に4音上行して4音下行するモティーフが、3小節目では1点ホを出発音として始まるため､鍵盤上の右手のポジションを一音右にずらす感覚で一点ホを２の指（人差し指）で弾くことに留意させる。
5）歌うこととピアノを弾くこととは同価値として捉え、学生がある程度澱みなく旋律を弾けるようになった時点から、歌いながら弾くことを積極的に促す。歌うことで旋律の流れが認識でき、旋律を聴きながら弾くことで歌唱の音程を整えることができる。
6）高音部譜表以上に低音部譜表を読むことに苦手意識を持つ学生が多いため、大譜表の構造を理解した上で、自分なりに定点を決め、そこから音を掴むよう指示する。また、記されている音を一音一音個別に読むのではなく、必ず、今読んでいる音から隣接する音への音程を測ることで音を読みつないでいくよう指示する。
7）「は音」を弾きながら歌うことは、学習指導要領にも示されている「副次的旋律や伴奏を

聴いて歌う技能」に他ならない。他の音を聞きながら歌うことは、相対的に音程を捉えるトレーニングともなり得る。

8）弾き歌いも取り入れた片手ずつの練習を十分に行った後、両手奏を試みる。片手練習の際に意識できたことが両手練習でも同様に意識できるとは限らないので、片手で弾けるテンポよりも遅めのテンポから両手練習を始めるよう促す。

9）両手奏と歌を合わせる。片手での練習も歌いながら行っていたため、学生は困難を覚えることなく弾き歌いにチャレンジすることができる。8）の段階で弾き歌いを行うことも可能である。

10）子どもと音楽をすることを前提とした弾き歌いであるので、前奏とアインザッツの提示は常道とする。アウフタクトで始まる楽曲、または3拍子の楽曲のアウフタクトの示し方については、歌い出しの2拍前からを十分に意識して行うよう促す。一般的には「さん、はい」の声かけで行うが、示しづらい場合には「どう　ぞ」、「はじ　め」等、2拍を示すことができる言葉を用いてもよい。

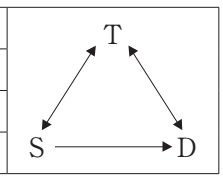
学生の個人差もあるが、「かえるの合唱」の読譜の１）から１０）までの工程は、平均約20分で終了する。ピアノの初心者であっても、音楽用語の体系的理解に至っていない学生でも、この工程を踏むことで、楽曲構造を理解した上での弾き歌いが可能となる。ピアノを弾くこと、ピアノと歌を同時に奏することについて、「できない」という思い込みを持たせず、段階的指導を正しく行うことで、読譜力は育まれていくものと思料する。

２　機能和声理論に基づく伴奏法

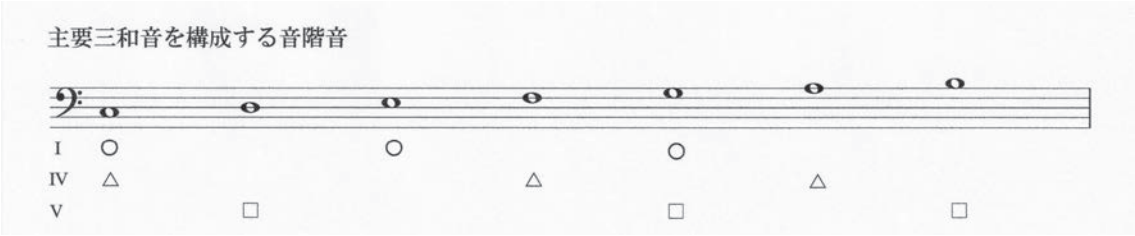
（1）主要三和音

音楽の教科書に掲載されている楽曲教材の内､民謡やわらべ歌といった日本古来の楽曲の他は、西洋の音楽理論、つまり機能和声理論に基づいて作られている。機能和声理論とは、調を構成する音階の各音には機能があり、音楽はその機能が有機的に結びついて構築されているもの、という考え方である。音階各音を根音とし、その上に3度ずつ音階音を積み上げてできた音階固有和音もまた、根音となる音階音の機能を有する。（表１参照）

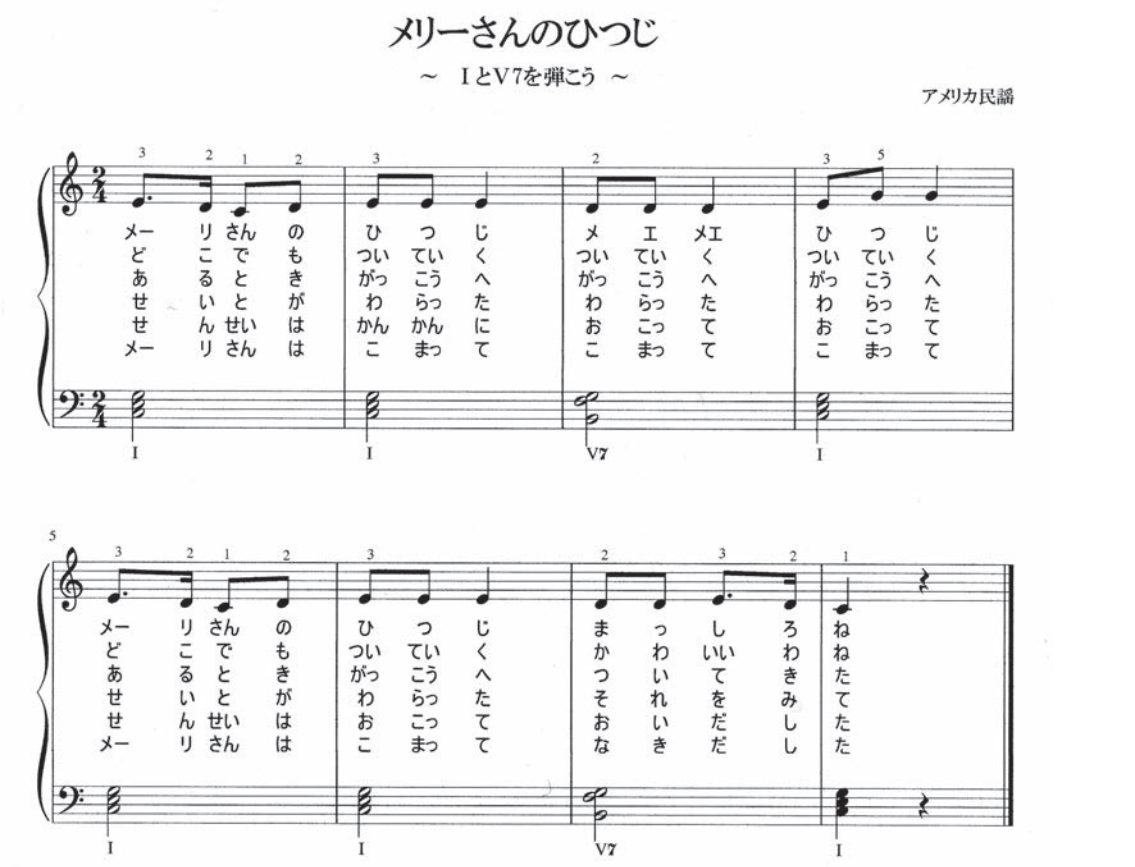
表１　和音機能に基づく和音連結の法則

機能	ドイツ語	略号	主要和音	副三和音	
主音度機能	Tonika	T	Ⅰ	Ⅵ（Ⅲ）	
属音度機能	Dominante	D	Ⅴ	Ⅶ（Ⅲ）	
下属音度機能	Subdominante	S	Ⅳ	Ⅱ	

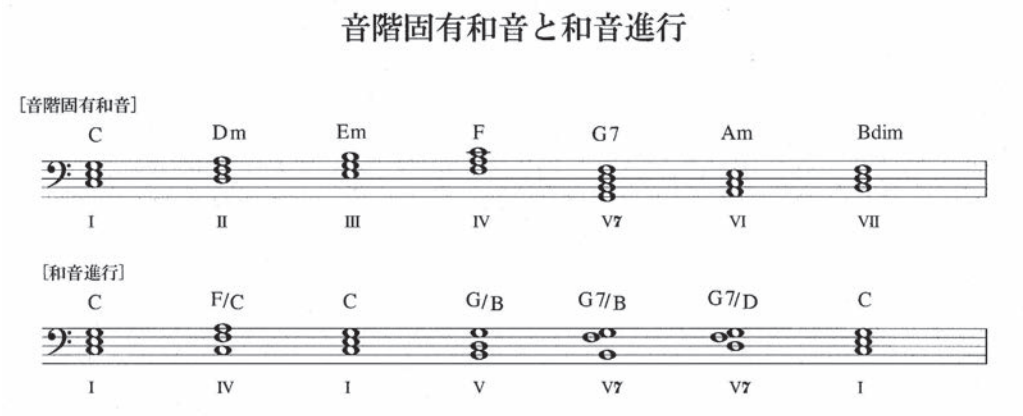
音階固有和音の中でも和音の各機能を最も強く持つ主要三和音の構成音をピックアップしてみると、その3和音で音階の音をすべて網羅できることから、その調の音で作られている旋律には、主要三和音のいずれかの和音が伴奏として適合できると考えられる。（譜例2参照）それゆえ、伴奏法習得のファーストステップとしては、主要三和音及び属七（V7）の和音をつなげたカデンツを徹底して弾くことで和音進行のパターンを体得し、課題曲にカデンツの伴奏を付けて弾き歌いすることを提案する。（譜例3及び譜例４参照）



譜例２



譜例３



譜例４

（２）教材楽曲

教科指導に有用なピアノ演奏力を育む場合、弾き歌える力の育成が目的となるので、その教材は教科・音楽において必修課題である歌唱共通教材及び子どもの歌を用いることが望ましい。（表２参照）歌唱共通教材の中には、各学年に1曲ずつ日本古謡やわらべ歌といった西洋の機能理論で伴奏を付すにはそぐわぬ楽曲が含まれている。これらの楽曲の学習の際には、和音伴奏にこだわらず、指導書等に掲載されている楽譜を用いる。また、わらべ歌などは口伝のものであるので、アカペラで音程正しく歌うことを狙いとした指導も考えられる。子どもの歌のジャンルは、明治期から歌い継がれている唱歌から現代のアニメーションソングまで実に多種多様であるため、教材として用いる子どもの歌は、以下の点に留意して選曲することとする。

一、音楽の教科書に掲載されている楽曲であること

一、子どもの歌で多用されている調の楽曲を選ぶこと（ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調等）

一、繰り返しを除き、読譜する小節が16小節を超えないこと

一、幼小連携を視野に入れること

表２に掲載した楽曲は以上の観点から選んだものである。各曲に用いられる和音を分析した結果、主要三和音はほとんどの楽曲で用いられており、伴奏法のスタートプログラムの課題としてもふさわしい選曲となっている。教材楽曲には、副三和音や借用和音が使用されているものも多数含まれる。これらの和音は機能和声理論に則りつつ、主要三和音のみの伴奏では得られないニュアンスを楽曲にもたらすものとして、主要三和音を用いての伴奏を体得していく中で、随時取り入れていきたい。教材として用意する楽譜は、楽譜制作ソフトを用いて教師が作成する。大譜表の高音部譜表には旋律を、低音部譜表には和音と和音記号を記す。（譜例３参照）その裏面には和音記号を見て伴奏付けを行うことができる教材として、表面と同一の、しかし和音伴奏は削除した楽譜を掲載する。

表２

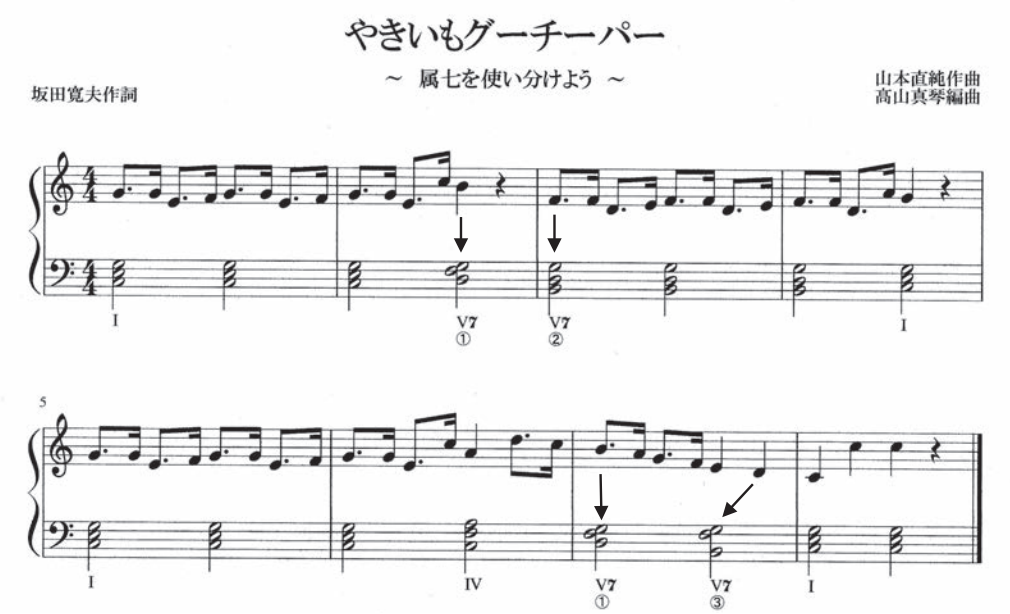
初等教育学科　ピアノ実技A･B　弾き歌い課題一覧(子どもの歌)

No.	曲名	拍子	調	使用和音		
				主要三和音	主要三和音以外	
1	かえるのがっしょう	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
2	メリーさんのひつじ	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅴ7		
3	ぶんぶんぶん	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅴ		
4	こぎつね	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
5	せんせいとおともだち	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
6	かっこう	4分の3	ハ長調	Ⅰ、Ⅴ7		
7	幸せなら手をたたこう	4分の4	ヘ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
8	ハッピー・バースデー・トゥー・ユー	4分の3	ヘ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
9	山の音楽家	4分の2	ト長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
10	こいぬのビンゴ	4分の2	ト長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7	副三和音	
11	しゃぼんだま	4分の2	ニ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
12	めだかの学校	4分の4	ニ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7	副三和音	
13	あめふり　くまのこ	4分の2	ニ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7	副三和音	
14	ぞうさん	4分の3	ヘ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		借用和音
15	かわいいかくれんぼ	4分の2	ヘ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7	副三和音	
16	せんろはつづくよどこまでも	4分の4	ト長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		借用和音
17	世界中のこどもたちが	4分の4	ト長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7	副三和音	借用和音
18	さんぽ	4分の4	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7	副三和音	借用和音
19	おはよう	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
20	おべんとうのうた	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
21	おかえりのうた	4分の4	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
22	ゆき	4分の2	ヘ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
23	まめまき	4分の2	ニ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
24	うれしい　ひなまつり	4分の2	ハ短調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
25	こいのぼり	4分の3	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		借用和音
26	たなばたさま	4分の2	ト長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
27	たきび	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
28	やきいもグーチーパー	4分の2	ハ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		
29	あわてんぼうのサンタクロース	4分の4	ヘ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		借用和音
30	おしょうがつ	4分の4	ヘ長調	Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ7		借用和音

（３）属七の和音の扱い

属七の和音は、楽曲内での使用頻度がⅤよりも高いため、ピアノの初学者にも属七を用いての伴奏を学習初期の段階から課していくことが望ましい。（譜例３参照）属七を扱う場合、特に留意すべきは〈省略音〉である。（表3参照）「メリーさんのひつじ」の場合、第３小節及び第7小節に配された属七の和音は、本来4つあるはずの構成音が３つしか使われていない。省略された音がどこにあるかを学生に問い、旋律の中に配されていることに気づかせることで、属七を伴奏に用いた場合の省略の原則を学生に理解させることができる。「やきいもグーチーパー」は旋律の音に応じて属七を選ぶための練習曲として用いるものである。（譜例５参照）Ⅴ7①、Ⅴ7②、Ⅴ7③と示された3種類の属七の和音に旋律の音を組み合わせることで、属七の4つの構成音が揃うこ

とを、学生はそこに生じる響きとともに理解していく。属七を用いる場合の注意事項は、旋律と属七を構成する音の重複によって生じる〈美しくない〉響きを避けることにある。表３に示されている具体的事項については、重複不可とされている音を実際に重複させて響きの確認をすることで、学生はその意味を理解することができる。伴奏法を修得していく中で、和音の形態を響きによって使い分けられる耳と感性が育つことも期待したい。



譜例５

表３　属七を用いる場合の注意事項

	重複	省略	進行方向
第7音	不可	可	2度下行
第5音	可	可	自由
第3音	不可	可	2度上行
根音	可	不可	自由

（４）和音進行

表１に示した和音進行の原則を主要三和音を用いて表してみると、T⇔SはⅠ⇒Ⅳ⇒Ⅰ、T⇔DはⅠ⇒ⅤあるいはⅤ7⇒Ⅰ、S⇒DはⅣ⇒ⅤあるいはⅤ7となる。楽曲の和音構造は、この和音連結のパターンが組み合わされたものであるので、伴奏法を学ぶ初期の段階では、まずこれらの和音進行のパターンを徹底して繰り返し練習し、和音記号を見ただけで指が和音を掴めるまでにな

ることを提案する。また、機能連結の法則については、主音度機能（T）と下属音度機能（S）、及び主音度機能（T）と属音度機能（D）は双方向に動くことができるが、下属音度機能（S）と属音度機能（D）については下属音度機能から属音度機能へ一方方向にしか動けないことを示し、属音度機能は主音度機能へ回帰する働きを有するので、下属音度機能へ進むことは原則無い、という理由も学生に明示しておく。しかし、この機能連結の法則はあくまで原則であり、属音度機能から下属音度機能への進行が見られる楽曲も皆無ではない。作曲者のイマジネーションが原則を越えたものとして、その部分の良さをしっかり感じ取ることも、学生にとっては良い学びになるものと思料する。

まとめ

新学習指導要領においては、育成を目指す児童の資質・能力を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の３項目に整理し、学びの際に「何ができるようになるか」を教師が焦点的に捉えられるよう明文化している。教職課程に在籍する学生に対しても、上述の３項目を学生の学習状況を分析する観点として用いることで、教師は自身の指導のあり方を省察し、改善することが可能となると考える。「学生の何をできるようにしたいか」については、その事柄、目的、手法を常に問い続ける必要がある。学生が、「できた」という自信を得られる授業を構成していくことが、教師に課せられる最も重要な課題であると言える。本稿で示した読譜及びピアノの指導法は、知的作業と実技演習を一体化させた極めて実践的な手法である。教科・音楽を指導するための準備として、また、学生が自身の能力をピアノ演奏という形で開花させる一助として、本指導法を改めて提案するものである。

〔参考文献〕

・『いろいろな伴奏で弾ける選曲　こどものうた　100（保育実用書シリーズ）』
　2000年 5月　第30版　チャイルド本社（東京）

・『これなら弾ける！　保育のうたピアノ伴奏160　保育園幼稚園の先生が選んだ人気曲・定番曲がいっぱい！』
　2014年 4月　第5版　ナツメ社（東京）

・『小学校教員養成課程用　最新　初等科教育法（改訂版）』
　2011 年 2月　第1版　音楽之友社（東京）

・『新版　実用和声学　－旋律に美しい和音をつけるために－』
　中田喜直著　2015年 10月　新版第8刷　音楽之友社（東京）

・『平成29年度3月告示小学校学習指導要領対応　ひと目でわかる！小学校「学習指導要領」解説付き　新旧対象本』
　2017年6月　初版　通信出版局（東京）

・『ママ　僕ピアノ嫌い！』
　室井摩耶子著　1996 年 8月　第９刷　芸術現代社（東京）

・髙山真琴「歌唱共通教材簡易伴奏作成の試み　－実践的歌唱指導のために－」
『國學院大學人間開発学研究』第2号　2009年 2月　國學院大學人間開発学会（神奈川）
・萩原英彦「和声法学習への方法試論　－Kadenzの基礎およびその展開－」
『武蔵野音楽大学研究紀要』　第8集　1974年　武蔵野音楽大学（東京）

（たかやままこと　國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）